

東北学院で私が学んだこと

著者	安倍 富士男
雑誌名	東北学院英学史年報
号	36
ページ	51-54
発行年	2015-03-15
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00000275/

東北学院で私が学んだこと

安 倍 富士男

1. はじめに

私は昭和56年に英文学科に入学し、学部、大学院と併せて7年間在学し、昭和63年に修士課程を修了しました。修了してすぐに盛岡市にあるカトリックミッションスクールの盛岡白百合学園中学高等学校に勤務し現在に至っております。学部時代から大学院まで、生成文法を研究テーマにし、この間、平河内健治先生にずっとご指導を頂きました。また長谷川松治先生をはじめ、大石正幸先生など、主として英語学、言語学系の先生方に篤くご指導を頂きました。さて、現在の教育活動にどのように東北学院での学びが活かされているかについて述べたいと思います。7年間もお世話になっていたため、様々な事柄が現在の私の教育活動の基盤を形成しており、はっきり絞ることは大変難しいと感じています。その中から、いくつか紹介したいと思います。

2. 東北学院の授業と今の私

学部時代に川嶋順先生の英語音声学の授業を2年間受講したことが今でも大変役に立っています。1つ1つの音について、また音の変化などについて詳しく学ぶことができました。今も英語の授業中に、黒板に口腔断面図を書いて、舌の盛り上がり、歯の閉鎖、唇の形などを書いて示すことがあります。ネイティブも含めて同僚教員で、そんなことをしている例をあまり見たことがないので、おそらく私に独特のもの、つまり東北学院の恩恵だと思っています。

この英語音声学が象徴しているように、英文学科出身の英語教員と教育学部出身の英語教員の間にはいくつか違いあるように思います。その1つが、前者が英語や言語について相当専門的かつ、広範にトレーニングを積んでいるということがあげられると思います。例えば、音変化については、最近、高校の英語教科書で必ず取り上げられるようになりましたが、練習する用例が少なく徹底しきれないのが実情です。そこで私は、「音変化練習帳」という自作プリントを作成し、音読練習に入るまえに、徹底して練習するようにしていますが、こうしたことが可能なのも音声学、音韻論を専門的に学んだおかげだと思っています。

英語学系の授業を取るが多かった私ですが、文学系の授業で大変役に

立っているのが、志子田光雄先生の英詩の授業です。勤務校では、毎朝、聖歌を歌い、授業では聖歌やロック、ポップスの曲を扱うことがあります。その際に、歌詞の内容を理解しなければならず、大学時代の韻律分析や修辞法の知識が大変役に立っています。先生の著書「英詩理解の基礎知識」は今でも時々参照させて頂いています。蛇足ですが、私が生徒のために訳したAmazing Graceの歌詞が、10年程前、大手化粧品会社の販売促進用パンフレットに掲載されたことがあります。

普通の英語の授業では、古い英語や英語以外の言語を扱うことはほとんどありません。しかし勤務校がカトリック校のため、ラテン語、ドイツ語、古い時代の英語の歌をよく歌います。そのため、歌詞の内容を生徒に伝える必要があり、時々、OEDや羅日辞典を引きながら、訳文を作り、発音を指導しています。こうしたことが可能なのも東北学院で多様な言語、様々な時代の英語に触れる機会があったからだと思います。長谷川松治先生と数人の院生で、13世紀の英語で書かれた*Ancrene Wisse*（『修道女の戒め』）の自主読書会は、当時は相当苦しかったはずですが、今は懐かしい思い出です。また、学部から大学院にかけてラテン語、ドイツ語、フランス語も学ぶことができました。こうした言語に関する広範な知識が今、大変役に立っています。

次は授業の内容ではなく指導法についてです。ジェイムズ・ヴァーダマン先生の米文学のゼミが印象に残っています。先生は、予習をしてこなければ授業に出る資格なし、を信条にしておられたので、テキストに予習の書き込みのないゼミ生は「Go out, now!」と、授業開始前に本当に部屋から追い出されました。30年以上も経っているのに今でも時々、このことを思い出することがあります。授業の指導法に迷った時など、こうしたエピソードを時々思い出しては、指導法を向上させるよう心がけています。

3. 東北学院の目に見えない影響

授業やカリキュラムという訳ではないのですが、東北学院で身につけ、その後の教育に役立っていることがあります。

1つめは、論文執筆のためのPCスキルです。私が在籍していた頃は、論文執筆が機械式タイプライター、電子タイプライター、ワープロ専用機、パソコンとめまぐるしく変わった時代でした。タイプライターで卒論を書き、修士論文はMacのワープロMS-Wordで書きました。この修士時代にPCのスキルを習得したおかげで、その後、教職についてからは、自分の原稿執筆はもちろ

んですが、学校全体の成績集計から、入試・教務関連のデータベース構築などを行い、校務を効率化することができました。

このITに関する活動は、勤務校の業務効率化を超え岩手県、さらには日本に広がりました。1990年代後半、インターネット幕開けの時代には、文科省のインターネット100校プロジェクトに参加して、日本の最初のインターネット利用校として教育の情報化に参画しました。また、岩手県全体の情報インフラの整備にも微力ながら貢献することができました。そうした中、1999年に世界初の「インターネットを使った海底からのライブ授業」を国連大、岩手県、NTTの協力を得て行うことができました。

このようなIT技術を使って教育活動を活性化させる試みを2000年代に入ってから続けてきました。いくつか紹介致します。環境教育教材「北東北の樹木図鑑」の出版。iPodを活用したリスニング指導法の開発。修学旅行をライブ中継し「修学旅行ホームページ大賞」を受賞したこと。ネットで自作英語学習教材を公開していること。日本で最初の宮沢賢治ホームページを作り、全国の小学生と遠隔共同学習を行ったこと、等があります。また少し変わったところでは、石巻方言に関する音声データベースをネット上で公開し教材を提供したこと。ハンドボールの動画教材を作って地域の小学生の育成に努めていること。現在、ハンドボールスポーツ少年団を主宰して11年になりますが、育てた子供たちの中には日本代表になったものものあります。

こうした活動は英語とはだいぶかけ離れ、統一感にも欠けているようにも見えます。しかし、私にとっては、どれもそのとき、そのときに必要とされた物事に対して、心を込めて対応した結果なのです。こうした教育活動の基底には、東北学院で学んだ「Life（いのち）、Light（光）、Love（愛）」の言葉が影響しているのではないかと、感じるがあります。

2つめは、自分の教師としての姿勢は、恩師の平河内先生に強く影響を受けていると感じていることです。ますます話題が英語から離れ恐縮ですが、中高の教育活動は教科指導だけではなく、生活指導、進路指導、HR指導、部活動指導などがあり、どれ1つとっても私たち現場教師にとって欠くことができないものです。そうしたことへの東北学院の影響を述べることもまた大切だと思うのです。

さて、卒論と修論の指導をして頂いた平河内先生には、多くのことを学ばせて頂きました。専門の言語学はもちろんですが、ここでは、一番影響を受けた面、つまり先生のお人柄についてご紹介します。先生は私たち院生を厳しく叱

咤激励されることはなく、あれこれ細かい注文をつけることもありませんでした。テーマや研究方法については、「自分で探して自分で論考をまとめるように」というスタイルで伸び伸びと指導して頂きました。私など本当に海のものになるか、山のものになるかまったくわからない院生であり、本当はとても困っていたと思うのです。しかし、先生はそんなことは意に介さず、研究計画のことで悩み、相談に伺うと、「まあ、なんとかなるから、がんばれ。」といつも慈愛の念を持って忍耐強く励まして下さいました。さらに、時には院生と英文科の先生方との対抗野球試合をやったり、夜には懇親会をして、院生たるものの姿勢、学ぶものの姿勢、社会人一步手前の人間としての姿勢を教えて頂いたと思っています。こうしたことは、正課の授業ではないのですが、人格形成という面においてとても大きな影響を与えるものだと思っています。

大学の研究以外でも、先生は仙台カウンセリング研究会を主宰しており、仙台市内の大学生にカウンセリングを指導されていました。時々、私も連れて行って頂きましたが、当時は活動の意義について何も理解できていませんでした。しかし今、教員になってカウンセリングの考え方や技術がいかに大切かを知ることになり、先生の活動の広さを今になって噛みしめている自分がおります。

このような平河内先生の全人格的な教育スタイルが、今の私のバックボーンになっていると思っています。今、生徒に接する時に心がけていることは、愛情を持って接し、まだ開花していない才能（タレント）を大切にし、将来必ず芽を出すように仕向けてあげることです。教職にある自分の勤めは、本人も気がつかない才能を認めてやり、褒めて伸ばしてやることだと思っています。こうした自分の姿勢を顧みる時、どこにその源泉があったのかと考えることがあります。そして、それは間違いなく、私自身が若い日に、東北学院に出会い、平河内先生に出会ったからだと感じかされるのです。